

西村伊作の幼年時代を中心に

葛井 義 憲

はじめに

家庭環境、生活環境、社会環境、自然環境などは人間形成の上で少なからざる影響を与えるものである。命を授けられた乳児は、とりわけ自らが生まれ、育てられる家庭環境の特性、また、それを構成する年長成員の信仰、人間観、教育観、社会観などにその成長をおのずと規定されていくことになる。

たとえば、そのことを考えるにあたり、流浪のユダヤ人の歴史を取り上げてみたい。彼らが歴史の表面に現れるのは今から3750年位前のことである。それから450年ほど過ぎる紀元前13世紀頃まで、彼らは自らの故国を持つことができず、荒涼とした大地を彷徨う放浪と、他民族からの排斥、抑圧の歴史を繰り返した。こうした苛酷な環境は彼らに唯一神への信仰を深めさせ、同じ辛苦の歴史を歩み、同じ信仰を持つ同胞・家族との連帯を強めさせ、神よりそれぞれに与えられた才能、個性を磨かせ、使命(Vocation)に生きようとさせた。この神との固い結びつき、神との応答、神への祈りは悲哀と痛苦が消えることなくつづく環境の下で、最も信頼に足る、かけがえのないものであることを知らしめた。

旧約聖書、出エジプト記20・12は彼らが伝えつづける「親子の愛情」について記している。その20・12は「あなたの父母を敬いなさい」という「戒め」を綴っている。この「戒め」は

有名な「十戒(Ten Commandments)」に位置し、その5番目に置かれたものである。これは親がいかに子どもを愛し、家庭を大事にしつづけたかを告げるものである。

彼らは厳しい環境の中で、少しでも子どもを大らかに受け入れ、子どもを肯定し、向かい合って育てようとした。というのは、彼らは逃れられない冷厳で困苦を伴う環境を生きるにあたり、その苦難、苛酷に耐え、それを凌いで前進できるものは「自己が肯定されているとの事実」「自己が心の底から愛されているとの確信」以外になかったからである。そしてその確信は「神から一方的に選ばれた」との事実より生まれるものであった。

旧約聖書、申命記7・6～7はその神の「選び、注がれる愛」を以下のように記している。「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちはどの民より貧弱であった。」

神の側からの計りがたい、一方的な選び、肯定と、神の愛がこの弱く、貧しい者たちに注がれているとの実感は果てることのない苦難の日々を過ごす彼らに生きる力となり、不安と恐怖のもとにある彼らの行く手を照らす信頼の灯火となった。そうした神の愛に浴した彼らがお

のずと子どもを強く愛し、受け入れ、肯定しようと努めることは不思議でない。神と共なる困苦の歴史はこの苦渋を超えて、不撓なる、優しさに包まれた世界・人間形成を促していた。そしてそこで慈しまれた子どもたちは彼らに注がれた愛を自己以外へとほとぼしらせ、おのずと仲間や兄弟姉妹を愛し、親を敬おうとする。また、苛酷な日々を送る「他の小さなもの」に愛心を傾けることを学ばせる（「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。（中略）これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。」レビ記19・9～10）。

しかし、かかる愛の重要性を知らされ、それを実践しようとする彼らの内にも次のような嘆きの言葉があった。「愚かな息子は父の悩みとなり、産んだ母の苦しみとなる。」（箴言17・25）。神の大きな愛を実感しつつ、子どもたちに愛を傾けて養育しても、しかし、子どもたちに対する苦悩は尽きることがなかったのも事実である。しかし、掛け値ない親の慈しみはいつの日か子どもたちにもその愛の素晴らしさを分からせるときがあると信じ、愛を傾けつづけようとする。

本稿で取り上げる西村（大石）伊作もまた、ユダヤ・キリスト教の教えのもとで育ち、親たちから多くの愛を受け、その愛を糧にして生きた人物であった。彼は1884（明治17）年9月6日、和歌山県新宮町のキリスト教徒の家庭に誕生した。それは「キリシタン禁制の高札」が撤去（1873年）されてからわずか10年ほどしか経たない頃のことであった。明治維新国家はキリスト教邪教観を一掃することをせずに「文明開化」をもたらそうとした。このようなキリスト教への嫌悪感、排除が残る明治国家の中で、人々はなぜキリスト教に回心し、それをもって

いかなる教会（＝集団）形成、家庭形成を願い、そこに集う子どもたちをどのように養育しようとしたのだろうか。これまで、明治20年前後のある特定のキリスト教徒の家庭に光をあて、そこで成された教会（＝集団）形成、家庭形成、人間形成に関する研究は管見によればなかった。本稿は西村伊作の幼年時代を中心に、伊作の親たちがどのようにキリスト教を受容し、それをもっていかなる教会（＝集団）形成、家庭形成、人間形成を行い、福音を伝えようとしたのかを考察するものである。

1. 漢訳聖書との出会い

西村（大石）伊作の父である大石余平は1854（安政元）年に新宮に生まれた。大石家は武士ではなかったが、医者、漢学者などを出すこの地の名家であった。この一族は当地の習俗、伝統に囚われることを嫌い、また、権威におもねる事を良しとはしない「反骨精神」の旺盛な者たちであり、未知なるものに大きな関心を寄せる「進取の気性」を備えた者たちであった。そして伊作の父余平もまたかかる家で養育されたこともあって、新しい海外の知識にいち早く関心を持ち、「邪教のキリスト教」にも興味をいだいたように思われる。それは妹大石睦代を大阪のミッションスクール、梅花女学校へ1880（明治13）年に進学させた事からも窺われる。

この梅花女学校は澤山保羅によって1878年に開設され、その2年後に、伊作は「耶蘇の学校、梅花」へ妹睦代を入学させた。そしてその睦代は1882年に浪速教会で洗礼を受け、同年、新宮への帰省の折に「漢訳聖書」を携えてきた（葛井康子・葛井義顕・葛井義憲共著『風の旅人』朝日出版社、2009年、143頁）。余平はこの「漢

訳聖書」を通してイエスの言動，キリスト教に関心を示した。その関心の一端は伊作の著書『我に益あり—西村伊作自伝—』（紀元社，1960年）にも綴られている。

その聖書のマタイ伝を読んだ私の父〔余平〕は、イエスの山上の説教を見て驚いた。その教えは、余平が持った教養である支那の古典の道徳と比べて、その表現が全くちがっていた。「幸なるかな、心の貧しきもの」「幸なるかな、義のために責められるもの」イエスは人間一般の論理と反対なことを言っている。理論でなく、わかりやすい人間の情を表わしたことばのみを発する。イエスは学者や、物知りや、金持ちや、官吏がきらいだ。イエスは習俗の法則に縛られないで、人間性を率直に表わした言動をする。それが私の父、余平の心にぴったり合った。余平は心の目がさめた。(21頁)

余平はマタイによる福音書の「心の貧しい人々は幸いである。悲しむ人々は幸いである。」(5・3～4)、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(5・44)などのイエスの言葉に触れている。そしてこの実践するには難しい言葉を発するイエスその人は語りかけた相手である弱く、貧しい人々に暖かなまなざしをむけ、彼らを真剣に愛し、赦そうとする。そのことを、余平は睦代から手渡された「漢訳聖書」を通して少しずつ気づかされる。

この1882年の聖書との出会いはキリスト教に関心を持たせ、そのことがキリスト教を伝道する山本周作（信徒伝道者）との1883年の交流を用意していった。それはJ.B.ヘール宣教師（1877年に来日したカンバーランド長

老キリスト教会宣教師（A Missionary of the Cumberland Presbyterian Church）の「日記」の中に記されている¹⁾。山本周作は1883年夏、キリスト教伝道をするために新宮を訪れた。そしてその夜の宿に窮しているときに余平と出会った。余平はこの山本の旅の目的を知って、「私の家へいらっしゃい。襖絵を描く米津〔方舟，キリスト教徒〕という人からキリスト教について聞いています。それに、私には、大阪の女学校〔梅花女学校〕でクリスチャンになった妹〔大石睦代〕がいます。もし家に来て、キリスト教を私に教えてくださるなら、喜んであなたをお客様としておもてなしします」と言った（J.B.ヘール著『日本伝道25年』大阪女学院，1978年，91頁，94頁）。

山本はキリスト教に大きな関心を示す新宮の余平とこの時はじめて会った。余平は睦代が持ち帰った聖書によってイエスの言行に打たれ、山本と出会う前に、既に、文人画家で、新宮に滞在するキリスト教徒の米津方舟からキリスト教の手ほどきを受けていた（同書，150頁）。そして1883（明治16）年11月、余平は信徒伝道者の山本に導かれ、宣教師、A.D.ヘールより洗礼を受けた（同書，136頁）。この受洗は伊作をキリストの僕となし、福音伝道へと駆り立たせた。

余平は洗礼を受けた翌年の1884年3月より5月頃まで、J.B.ヘール宣教師、山本信徒伝道者らと一緒に南紀伝道、すなわち、御坊、南部、田辺、新宮などで福音伝道をした。そしてそれぞれの伝道集会には、200人～300人が集まった。余平も受洗を通して知った「キリストによって救われた喜び、神の大きな愛、洗礼による新生」などについて説教を行っている。その福音伝道の様子は、彼が1884年5月、和歌山県南部の酒造業、山内量平（ルーテル教会最

初の日本人牧師、植村正久夫人季野の兄)にキリスト教への回心を迫った折のことからも窺われる(同書、155頁～157頁。『植村正久と其の時代』第一巻教文館、1976年、741頁～742頁)。彼は代々、神官であった山内家に育った量平に「基督教に頼らざれば、断じて真の救は得られない」(『植村正久夫人季野がことども』教文館、1976年、92頁)のだと悔い改めを迫り、彼に酒造業を止めさせて受洗させた。さらに、彼はこの南紀伝道の最中、家族がキリスト者となることも熱心に祈り、その家族伝道と祈りの結果、父大石増平、妻ふゆ、弟玉置西久が1884年5月、6月ごろに洗礼を受けた(『日本伝道二十五年』、134頁～161頁、171頁～173頁)。また、末弟大石誠之助(後年、医師となり、1911年、大逆事件で処刑された)も大阪西教会で同年1884年に洗礼を受けた(森永英三郎著『祿亭 大石誠之助』岩波書店、1977年、14頁)。

このように短期間の内に家族伝道、地域伝道を熱心に行うようになった余平は1882年に手にした「漢訳聖書」にある、キリストが分け隔て無く人々を救おうとして歩んだ十字架への道、また、社会の片隅で、小さくなって生きる人々への愛の活動に触れて心を打たれた。そしてヘール宣教師たちの直向な宣教活動に接するうちに受洗へと促され、さらに、「信徒伝道者」へと変えられていったのである。

2. 見守られて、支え合う

大石増平(余平の父)は医師であった父貞舒と異なり、東京などへ材木を船で運ぶ商人であったようだ(西村伊作著作『我に益あり』、57頁、90頁)。余平もそうした材木などを手がける商売をしていたのだろう。妻ふゆの実家は

奈良県吉野郡にある西村家、広大な山林を有する地主であった。そうした繋がりからも、余平が材木を商いつづけることは余り難しいことではなかったはずだ。

余平は材木商をしつつ、精力的に伝道活動をつづけた。そして家族伝道が成果をあげた1884(明治17)年6月10日、余平たちは自分たちが礼拝する新宮教会を完成させた。この教会の敷地は余平が提供した彼の土地、新宮の仲之町の51坪であった(『日本伝道二十五年』、173頁)。J.B.ヘールの『日本伝道二十五年』を見ると、「新宮伝道の発展、1884年」の書き出しは「新宮では今までに四人が受洗した。大石[余平]さん、須川[謙蔵]さん、南[安]さん、鶴次[新屋鶴次]さん」となっており、兄A.D.ヘールの1885年度の「伝道事業報告」によると、新宮教会はこの年度、受洗者が20人あって教会員数が31人となり、日曜学校生徒が10人、婦人会出席者の平均が8人と報じ、小さいながらも着実に教会形成・運営が行われ、成長していることが分かる(同書、166頁、244頁)。この「伝道事業報告」書が作成された頃は、ヘール宣教師たちは南紀の各教会を巡回して訪ね、新宮教会には定住する牧師がいない中で教会運営であった。それ故、教会員たちは数は少数ながらも、お互いが親密に寄り合い、信頼し合い、助け合って教会を盛り立てていかなければならなかった。

大石(西村)伊作はこの小さなクリスチャン共同体、キリスト教の香りがただよう信仰共同体の中に誕生した。誕生は1884(明治17)年9月6日、新宮教会が完成してからおよそ3ヶ月が経った頃であった。伊作は自らの意思で信仰を決断する非キリスト教の家庭環境に誕生したのでなく、生まれたそのときからキリスト教を持つ家庭と教会に置かれたのである。彼はこ

の小さな信仰共同体について、彼の自伝『我に益あり』で、次のように述べている。

新宮の町では初めのうちはキリスト教に改宗した人が十人余りあった。その人たちは非常に仲良くして、本当の兄弟のように交わり、熱心にキリスト教を研究した。皆が心の目がさめたような気持ちで、新しい生命を得た喜びによって信者たちの心がつながり、彼らはみなほんとうの肉親よりも親しい気持ちになって交わった。(39頁。)

伊作の置かれた信仰共同体、新宮教会はもの心がついた彼に上記のように映った。同教会員は皆、兄弟姉妹のように親しく交わり、親身にお互いの事を心配し合い、励ましあって信仰生活を送っていることが、幼子伊作にも分かった。また、彼らは信仰を強め、深めようとする思いに溢れ、懸命に聖書を学び合い、祈り合う姿も印象深い忘れられないものであったようだ。伊作はこのことについて語る。「[新宮の]キリスト教信者のグループはきわめて少数であって、他の社会と全く別な気持ちを持って非常に楽しい生活をした。宗教的につながれた心で互いに愛し合い、他の人々[クリスチャンでない人々]が「あれは変わった人たちだ」と言って横目で見ると、自分たちは実にお互いの心が分かり合って仲良くできた。だがこと宗教に関しては、聖書の解釈等については非常に議論した。互いに口角泡を飛ばして聖書を自分の思い通りに解釈してそれを議論し合った。その議論は物質的なことのために議論することでないから、彼ら相手同士はそれによって更に親密さを増した」と(同書、54頁)。

聖書をもって真剣に生きようとするキリスト

者たちの姿がここにある。キリストの愛を少しでも具現化しようと励む彼らの信仰的誠実さもある。幼子伊作にも、父余平は「全く人のために生きる」人、「この日本という国」を「心のうわしい人に満たされたところの美しく、楽しい国」に変革しようと活動する情熱家のように思われたのだろう(同書、40頁)。伊作はそんな父余平が大好きだった。また、周りの人たちから「容貌、正確、気質、癖」などが父余平によく似ていると言われ、嬉しかった(同書、16頁)。

そのような父、そして母を思い出すとき、伊作の心の内に「自然の風景」も一緒に浮かび上がってきた。彼は1919(大正8)年に出版した『楽しき住家』(警醒社書店)に幼き日の思い出を綴っている。

自分の幼い時からの記憶を繰り出してみると、みなどれもこれも楽しかったことばかり呼び起こされて来る様な心持がします。(中略)私の幼い時の楽しい思ひ出は、常に自然の風景を呼び起します。そして、其次には直ちに住居の有様、家屋や室内の様子を思ひ出します。(中略)私の最も古い記憶の一つは、多分私の二親にあるでせう。手を引かれて田圃道を歩いて居る。青い田がやはらかに広がり、田を渡る風が耳たぶを摩擦して静かな音をたてゝ居る風景画です。(中略)少し成長してからのことでも、楽しい思ひ出には必ず、山や川や樹立や土手や海などの美しい風景が先づ心に浮かびます。(中略)山や川や森は、我々を愛し育てて呉れる自然であるやうに、建物も家屋も我々を護ってくれる自然であり、我々の此の小さい家に住んで居ると同時に此大きな山、

川、森の間に我々が住むで居るのだと思ふと、此大自然も即ち我々の家であります。(1頁～3頁)

父母と過した日々は青々とした田圃に囲まれ、海に面した新宮、或いは、高く聳える杉や檜などの大木に守られた母ふゆの故郷、奈良県吉野郡下北山村の自然を抜いては思い出せないものであった。伊作の心には、余平、ふゆに手を引かれて青い田圃道を歩く幼き伊作の満ち足りた姿が鮮やかに残っている。しかも、海も大地も森も星も太陽も創造主である神が造り、その宇宙の内側で、人々は神に守られ、神より与えられた命を燃やし、自らの使命に励む。そのことを伝える聖書の「創造神話」(創世記1章～2章)を余平から教えられ、伊作も神が造った自然を通して神に抱かれ、愛されていることを実感したことだろう。さらに、長じて建築家にもなる彼が「建物、家屋」を「神の愛が息吹く砦」「神の守りの砦」と認識する背景には(拙論「西村伊作試論—危険な思想と理想の村—」(『名古屋学院大学論集《人文・自然科学篇》』35-2所収)名古屋学院大学産業科学研究所、1999年、9頁～10頁)、神が創造した樹々で建てられた建物の内に「神の愛が息吹く小宇宙」を見出し、幼き日よりその内にあっても神の守りと慈しみを確かに知らされていたからだろう。さらに、大好きな父と母の豊かな愛が詰まった自分たちの家屋、「家具類の凶案や建築、機械の発明」(『楽しき住家』、6～12頁)に興味を持つ父が、時折、自分の手で修繕した家屋は長男伊作に安堵感を与えていたようだ。

3. 奈良県吉野郡での生活

伊作は父母との思い出をより一層「自然」と重ねるようになる出来事に遇った。1885(明

治18)年早春、ふゆの弟である下北山村の西村家の当主、西村五郎作が病気で亡くなった(『我に益あり』、34頁)。結婚をしていた五郎作には、子どもがいなかったため、彼の跡継ぎが得られなかった。彼の母もんは長きに亘って西村家の財産を守り、増やす理財に富む人物であったので、息子五郎作の亡き後、この家の管理を行った。しかし、1887年春、もんは血の繋がる孫の伊作を西村家の養子とし、父余平をその後見人とした。父母と伊作は新宮を去り、下北山村上桑原の西村家に入った(同書、44頁)。

父余平が母ふゆと結婚したのは1877年であり、彼らは10年間新宮で暮し、お互いの愛情を育み、お互いを理解し合い、キリスト者となって数え4歳の伊作を伴って西村家へ戻った(同書、23頁～29頁)。

彼は伊作の後見人となって西村家で暮しだすと、広大な西村家の山林規模を正確に知るために、自らが考案した測量器械を用いて調べ、また、村人に手伝ってもらって立ち木の本数を数える仕事をした。また、信仰生活を行うために、20人ほどが収容できる小さな教会を下北山村上桑原に建てた(同書、45頁)。伊作はこの上桑原での1887年のクリスマスの光景を次のように記している。

その〔下北山村の〕教会は大きなケヤキの木が枝を張った下に建てられ、クリスマス・カードの絵のようであった。私の小さなときの初めての記憶の一部として覚えているのは、その教会におけるクリスマスである。父はヒカゲノカタラという蔓草を採って来て天井のぐりりへ張り回し、ナンテンの赤い実を持って来て、ほとんど自然のものばかりで装飾をした。

今日のようにクリスマスツリーへ豆電球をつけるようなわけにはいかなかった。そしてお祝いのお菓子をつくり、村人を集めて皆に配った。私はそのときもらったお菓子の美しい色や形を今でも思い出すことができる。村人はそれが非常に珍しい祭りだと思った。(同書、46頁)

冬が訪れた下北山村の村人たちは赤いナンテンやつる草でクリスマスの飾りつけをした教会へ赴き、礼拝に出て、信徒伝道者余平の説教を聴き、配られた余平とふゆたちが焼いたお菓子を手にしたことだろう。村人たちの多くは初めてクリスマス礼拝とクリスマスプレゼントを知った。渡来した西欧文明の衝撃を受けて、日本が近代化、西欧化を急ぎ進めて行く1887(明治20)年、西欧文明の伝達者的役割の一端を担うキリスト教信徒伝道者余平たちが救世主イエスの誕生を祝うクリスマスを下北山村へ伝えた。

余平はキリスト教信仰をもって山林業に励み、ふゆと伊作、そして1887年夏に生まれた、次男真子との日常生活を楽しんだ。伊作はそうした父母との下北山村での生活の様子を『楽しみ住家』の中に描いている。

私の父親は何んでも新しいことを試みたい性質であつたらしく、私の生まれた頃から基督教に改宗し、従つて色々な西洋のことを見聞しては、それを自分と試み、財産の整理や業務の規則から、日曜は必ず休業とすとか、食事は時間をきまつて家内中揃はねばならぬとか、その時分では余程変つた、急進的なやり方で、其時代の危険思想とせられた。(8頁)

西村家の山林を守り、その財産を正確に把握することに努める余平ではあるが、山林労働者・事務員の就業規則を決め、家族との憩い、交わりを大事にする生活を下北山村で行いだした。

余平が作った「日曜日は休日」との規則は月に1、2回の休みしかなかったこの地域に戸惑いを与えただろう。また、伊作たちは家族が揃って決まった時間に、祈りをもって食事を始めるのだという生活風景を聞き知り、驚いたことだろう。その他に、彼は「偶像崇拜」を嫌うプロテスタント・キリスト教を貫くために、西村家の「仏像や位牌」を物置にかたづけ、また、代々守り続けてきた西村家の広大な山林は創造主の神から委託されたものであると公言し、西村家親族の反発をかったことだろう。

西洋文明の運搬者としての役割を有す「キリスト教伝道者」の言行は西村家の親族や村人たちにとって「奇異」「危険」なものに思われた。余平の周囲の人々は彼ら夫婦の生き方、行動、発言を理解しかねた。たとえば、彼らが物乞いする少女を預かって、一人前の人間に育てようと努める好意も奇妙にしか映らなかったようだ(『我に益あり』、45頁～46頁)。

余平夫妻が発する「困った発言」、彼らが取る「理解しがたい行動」は1888年に西村家の親族会議を開かせ、余平の「後見人解除」の法的手続きを行わせた(同書、47頁)。西村家が何代にも渡って山林を育成、拡大してきた事実からすれば、余平たちを下北山村の西村家から放逐する行動に出たことは不思議でなかった。1888年、余平、ふゆ、伊作、真子は下北山村を去って、新宮の大石の家に戻った。

4. 信徒伝道者として

4人で再開した新宮での生活は新宮教会を基

盤に行われた。「信仰共同体」は彼らが不在の間も健全に維持され、信仰活動の進展、生活の改善も行われようとしていた。彼らは宣教師の生活を模範とし、自分たちにとって「良い」と思われるものをそこから積極的に吸収しようとした。それ故、彼らの生活は次第に欧米風になっていった。伊作は新宮の「信仰共同体」の生活改善風景を以下のように綴っている。

自分たちの日常生活を改善する手始めに、食物を改善しなければならん、米飯ばかりを多量に食べるのはよくないということを考えて、パンを焼くことを研究した。それには“パンを焼く会”というものを開いた。新宮の町の中に小山があって、その山のとある木陰でその会を開き、七輪で炭を起しうちわでパタパタあおいで、天火をその上に乗せてパンを焼いた。(中略) パンのほかに牛乳を飲むことが必要だと思って、信者の一人である百姓の男にウシを飼わせた。とうとう終りにはその男が本職の牛乳屋になって、毎日牛乳を配達して、それを商売にするようになった。(中略) これはこの町の牛乳の普及にたいへん効果があった。(同書, 55頁)

新宮教会を中心として生活する人々は信仰をもって生活することを奨励するに留まらず、皆で協力して生活改善を行い、パンが滋養に良いとなると、「パンを焼く会」を即座につくり、牛乳が健康によいと分かると、皆で牛を飼って牛乳を飲もうとする。この生活の改善、進歩に繋がると思われるものに対して瞬時に実行しようとする彼らの連帯、実践力には目を見張るものがある。そしてこれは子どもたちの人間形成の上で、また、近代化していく日本の子どもた

ちにとって幼児教育、発達教育は必要だと分かると、幼稚園開設に対しても表れた。伊作はこのことについて次のように語る。「私が5歳になったころ、私の父は幼稚園を始めた。私のため、そして新宮の町の子供たちのために、教会の会堂の中で幼稚園をしたのである。(中略) 山本おひでさんというたいへんきれいな、若い女の人が、その幼稚園の先生となって来た。大阪市に近い町の人である。おひでさんは非常に親切で、子供たちを愛し、いろいろな歌や、遊戯などを教えてくれた。」(同書, 50頁)。

余平は1888年、下北山村から戻ると、数え5歳になった伊作に幼児教育を行うことをも目的として、新宮教会の中に付属幼稚園を開設した。彼はキリスト教教育をもって、人格教育を行い、神を恐れ、愛と正義に生き、誠実で、勤勉で、健康な子どもたちとなる事を求めたようである(西村クワ著『光の中の少女たち—西村伊作の娘が語る昭和史—』中央公論社, 1995年, 127頁～129頁)。

余平たちの新宮教会を中心とした教会活動、教育活動はこの年着実に成果をあげだしていたようである。J.B.ヘールの『日本伝道二十五年』は「1889年2月に、私[ヘール]は新宮を訪れた。ミス・レヴィット [J.L.Leavitt, 婦人伝道者] がこの冬滞在しているところである。私には、彼女の働きによって、教会の礼拝に婦人の出席の数が、いちじるしくふえていることがわかった。二十四日に、私は五人に洗礼を授けた。教会は活動態勢が良く整っていた」(342頁)と告げている。新宮教会専従の牧師がいないなか、レヴィットのような婦人伝道者や余平のような当教会の中心人物たちがキリストの僕として精力的に教会形成、地域伝道に励む様子が描かれている。余平一家はこの地で信仰生活を行い、材木業をもって子どもたちを²⁾育てようと

望んでいただろう。しかし、1889年8月、紀伊一帯に洪水が襲った。新宮教会も浸水し、付属幼稚園の道具類、書籍、ベンチが流されてしまった。教会員たちも被害にあったが、お互いは結束して助け合い、また、教会員以外の人たちにも、彼らは積極的に救援の手を差し伸べた(同書、342頁～343頁)。こうした洪水に襲われた中で、懸命に支え合おうとする新宮教会員に変化が現れた。それは余平が信徒伝道者ながらも、愛知県熱田町で伝道活動をしようと決心したことである³⁾。創世記12章に記された、アブラハム(イサクの父)が神の呼びかけに応じて旅立ったように、伊作の父余平もまた神の召しと導きと守りだけにかけて伝道へと出ようとしたのである。

余平は新宮の家屋敷、田畑などを弟玉置西久たちに売却したり、預けたりして、1889年の洪水の後に、熱田神宮の傍の家へ移った。そしてそこに「キリスト教講義所」の看板を掛けた。また、彼らの生活費、伝道費は「亜炭」の採掘、売却をもって行おうとした(西村伊作著『我に益あり』、62頁、73頁。沖野岩三郎著『煉瓦の雨』福永書店1918年、16頁)。見知らぬ土地での伝道活動や商売は多くの困難や試練を伴うものであっただろう。1890(明治23)年4月、伊作は熱田尋常小学校へ上がっている。また、同年7月、3男七分も熱田で誕生し、伊作は2人の弟たちと父母とともに「キリスト講義所」の看板を掛けた家で暮らした。

成人後の西村伊作と親交を結んだ沖野岩三郎(牧師で、作家)は『煉瓦の雨』の中で、「[1890年ごろの]熱田で(中略)親子五人は随分苦しい生活をしたのです。夫れにエノク[伊作]さんが小学校へ入った時、神主の子供(中略)が組を組んで毎日の様にエノクさんを虐め通したものだ。甚い時は口へ一杯砂を捻ぢ込まれた

り、石で頭を打たれて血がたらたらと流れた事もあつた。『耶蘇、毛唐人、国賊』エノクさんは斯んな言葉の為に泣かされない日は殆ど無かつた」(17頁)と、伊作の熱田時代を述べている。「キリスト教講義所」の看板が掛かった家に暮らす「新参者」の伊作は洋服を着、帽子をかぶり、靴を履いて熱田尋常小学校に登校している。彼の周りの子どもたちは洋服を着、靴を履いていなかった。そのために、伊作の姿は彼らに目立ち、注意をひいたことだろう(『我に益あり』、68頁～69頁)。しかも、この1890年ごろは大日本帝国憲法(1889年2月)が公布され、教育勅語(1890年10月)が発せられた時期であり、それまでの西欧追随、模倣から自国の伝統、精神を重んじる国粹主義へと移行し出した時であった。それ故、欧米文化やキリスト教に対する排斥の気運も生じていた。伊作はこうした国家の移ろいに伴って味わった実体験を『楽しき住家』に記している。「或時は大勢の人々が私の[熱田の]家へ攻め寄せて来て、ヤソヤソなど嘸鳴つて暴れたことなども記憶して」いる(9頁)と語る。キリスト教伝道者余平たちに対する地域住民の迫害は相当激しいものであり、ある時は群集が余平の家を取り囲み、「耶蘇を屠れ」「耶蘇は国賊」と叫び、掛けられていた「キリスト教講義所」の看板が共同便所の中に放り込まれたこともあったようだ(『我に益あり』、73頁～74頁)。

余平はこうした迫害の中で、なおもキリスト教伝道を熱田で展開したが、そこで3人の子どもたちを養育しつづけることの難しさも知らされたようである。彼ら一家は1891(明治24)年、名古屋市南久屋町にあった愛知県庁が近くに見える家へ引越した。そして伊作は進歩的な教育をすすめるとの評判が高かった名古屋市南武平町にあった愛知県尋常師範学校附属小学校

へ転校した（同書，81頁）。子どもの教育に大きな関心を寄せる余平は同小学校の教育環境を調べ、伊作の成長発達に益すると判断して転居し、この地を拠点に伝道を展開しようと願ったのだろう。

5. 父の意志を継ぎたい—結びにかえて—

『日本伝道二十五年』は1890年，1891年の余平の動静を簡略に記述している。「大石さんは家族と共に，名古屋の近くの熱田に引っ越して，そこで彼の事業の鉱業〔亜炭採掘〕を営みながら伝道所〔キリスト教講義所〕を開いていた。彼は幾度も暴徒に襲われたが，その町の人々に福音を説教し続けた。名古屋の宣教師，日本人牧師，伝道者たちは朝の祈禱会を始めていた」と（366頁）。余平が熱田での嫌がらせのなかで福音宣教をおこない，また，名古屋へ引越しても，プロテスタント・キリスト教会の人たちと協力して，伝道活動，朝の祈禱会を持ち続けている様子が綴られている。そしてこのプロテスタント諸教派連合の「朝の祈禱会」は1891年10月28日にも行われた。開催場所は名古屋市南武平町に建った名古屋英和学校（1890年3月落成）チャペルであった。

その日は，余平，ふゆ，伊作がこの「祈禱会」に出席した⁴⁾。午前6時38分，岐阜県大野郡西尾村根尾谷を震源地とする大地震が濃尾地方一帯を襲った。J.B.ヘールはこの日チャペルで開かれた「朝の祈禱会」の様子を『日本伝道二十五年』に書いている。「祈禱の真最中に地震が起こり，建物を揺さぶった。人々は皆外へ飛び出した。ある者は家の表から，ある者は裏から飛び出した。大石さん夫妻は裏口から飛び出したが，ちょうど彼らが戸口から出た時，その家の煙突が倒れて彼らを押しつぶし，彼らは

死んだのであった。子供たちは両親に手を引かれていたが，かろうじて命は助かった。これが，キリスト教に回心して以来，神のわざのために全身を献げてきた人の最期であった。」（同頁）。

J.B.ヘールは大石余平，ふゆがチャペルの煙突の下敷きになって亡くなったことを「殉教」として捉え，彼の宣教活動に感謝し，残された家族が神の恵みのもとで送ることを祈っている。重傷を負った伊作は一命を取り留めた。

西欧列強に追いつき，西洋の文物を貪欲に吸収しようとした明治の日本の中で，その潮流にのって，その「文化，精神」を受け入れた大石余平たちは「早天祈禱会」の最中に帰天していった。長男伊作にとって，父母の死が神のいかなる計画のもとで行われたのか不分明であったと思われる。けれども，伊作は，この不慮の出来事を越えて，父たちが神から与えられた役割を誠実に果たそうとする意志とその実践を理解しようと努めた。彼は『我に益あり』で次のように述べる。

私の性格や趣味や考え方などは，どこから来たのであるか——私はその大部分は私の父親から来たのだと信じている。（中略）私は子供のときも，成人してからも，人々は私のすることや，言うことが私の父によく似ているという。（中略）私は（中略）意識的に，私の父の行為や思想を守って生きようとする。私の父はこんなことが好きだからと，私もそれを好きになり，父が嫌いだったと思うことは私もそれをしない。そういう風に何事につけても死んだ父の心に従い，父の霊の許しを受けて事をしたといつも考える。（中略）私は（中略）真実の孝行は親の心を自分の心とし，親の歩いた跡を歩こう

とする心であると思う。自分の心の中に親の心を守りもつことは、親が死んだあとの方がよくできる。(16頁～17頁)

余平とふゆの突然の帰天は数え8歳の伊作と二人の弟たちから愛育の存在を奪ってしまった。しかし、その不慮の死は父母が子どもたちに注いだ豊かな愛情に気づかせ、子どもたちの成長、生き方に対する父母の言行を熟考させた。伊作と弟たちは1892年より、下北山村の祖母西村ものもとで暮すようになるが、震災後のひと時、傷の癒えない伊作は新宮の祖父母大石増平、かよに引き取られて養生した(『我に益あり』, 90頁～92頁)。それから、もんと真子、七分が待つ下北山村の西村家へ入った。伊作はこの頃のことを回想して以下のように記している。「新宮でしばらく大石の祖父母といっしょに生活していた私は桑原の西村家の祖母の家へ行って、祖母や二人の弟とともに生活することになった。私はそのとき西村家の戸主となった。八歳であるけれども、私は大きな財産の家の主人となったのである。地震で父母が死んでから新宮の大石家の人々と私の祖母とが話をして、私は西村家の戸主となった。祖母は私の親権者である。」(同書, 94頁)。

伊作は桑原尋常小学校へ転校して、下北山村の子どもたちと一緒に川や山で日暮れまで遊んでも父母を失った痛手を消すことはできなかっただろう。また、莫大な財産を有す西村家の戸主となっても、父母を一瞬のうちに失った恐怖、不安感、寂寥は癒えなかっただろう。しかし、父、母が生前、伊作たちに大きな愛情を注ぎ、真剣に彼らと向き合って健康な心身を育み、キリスト教に基づく倫理を教え、自分たちがもった信仰を伝えようと祈る日々を思い出すとき、それは伊作たちの心に語りかけ、生きる力とな

り、確かな道しるべとなったことだろう。

伊作は下北山村でもんたちと一緒に過ごす日々の中で、父余平が讃美歌を小声で歌いながら仕事をし、散歩する姿を思い出していた。そして彼はその時、「親の心を自分の心とし、(中略)自分の心の中に親の心」を持ち続けたいと祈念したのである。明治10年代から20年代にかけて、「禁制されてきたキリスト教の教え」をもって、新宮町、下北山村、熱田町、名古屋市中で生き、働いた余平はこの日本に、敬神愛人の心が満ちる「神の国」を建設したいと願った。その余平の意志を継いだ伊作は伊作なりにその意志を展開していった。彼は長じて、「神の愛が息吹く砦」を建てる建築家になり、また、愛と平和と真理に生きることを奨励し、自主、自立の人となることを勧める学校、「自由と芸術」を基盤とした文化学院(1921年4月、東京神田駿河台に開設)の創立者となった。この文化学院創設者、伊作を支えた人々は与謝野鉄幹、晶子、石井柏亭、富本憲吉、有島武郎、戸川秋骨、菊池寛、佐藤春夫、阿部知二、河崎なつなど、また、文化学院で学んだ人たちは長岡輝子、入江たか子、高峰秀子、木村功、南田洋子、十朱幸代、山東昭子、飯沢匡、石丸寛、久里洋二、杉本苑子、水木杏子など、個性的で、才能にあふれ、人々に幸せをもたらそうと願って働く魅力的な人物たちである。伊作は余平がキリスト教をもって培った「心」とそれを通して描いた「夢」を自らの内に収め、祈りつつ、それを具体的に展開していこうと望む。

註

- 1) 山本周作は1880年9月に、カンバーランド長老キリスト教会の宣教師A.D.ヘール(Hail)から洗礼を受け、A.D.ヘールや弟の同教会宣教

師J.B.ヘールの宣教活動を積極的に応援した。
この兄A.D.ヘールは1878年10月に来日し、大阪居留地に居住して、弟のJ.B.ヘールと協力し合って宣教活動に励んだ。弟ヘールは兄より早く1877年1月に来日して、大阪居留地に住んで、伝道活動を行っていた。(J.B.ヘール著『日本伝道二十五年』、1頁～59頁)。

- 2) 余平は新宮教会員と一緒に「光塩社」という材木会社を経営していた。(西村伊作者『我に益あり』、57頁)。
- 3) 余平が熱田町での伝道活動を行う決心をした背景には、下北山村の西村家と絶縁し、彼の材木業があまり振るわなくなったことも原因していたと思われる。(同書、62頁)。
- 4) 『名古屋学院史』は大石余平について次のように記載している。「[1891年]9月1日、大石牧師(名不詳)が宗教・語学の教師として就任したが、同氏は約二ヶ月後の大地震で校内に於いて殉職している。」(名古屋学院、1961年、37頁)。

参考資料・文献

西村伊作者『楽しき住家』警醒社書店、1919年。
西村伊作者『田園小住家』警醒社書店、1921年。
西村伊作者『我子の学校』文化生活研究会、1927年。
西村伊作者『我に益あり—西村伊作自伝—』紀元社、1960年。
J.B.ヘール著『日本伝道二十五年』大阪女学院、1977年。
沖野岩三郎著『煉瓦の雨』福永書店、1918年。
佐波巨編『植村正久とその時代』第1巻教文館、

1976年(復刻版)。
佐波巨編『植村正久夫人季野がこども』教文館、1976年(復刻版)。
森長英三郎著『祿亭大石誠之助』岩波書店、1977年。
『愛と反逆—文化学院の五十年—』文化学院出版部、1971年。
『文化学院創立六十年記念展—西村伊作と与謝野晶子たち—』文化学院、1982年。
『名古屋学院史』名古屋学院、1961年。
真山光彌著『尾張名古屋のキリスト教—名古屋教会の草創期—』新教出版社、1986年。
加藤百合著『大正の夢の設計者—西村伊作と文化学院—』朝日新聞社、1990年。
西村クワ著『光の中の少女たち—西村伊作の娘が語る昭和史—』中央公論社、1995年。
拙著「西村伊作試論—危険な思想と理想の村—」(『名古屋学院大学論集《人文・自然科学篇》』35-2所収)名古屋学院大学産業科学研究所、1999年。
葛井康子、義顕、義憲著『風の旅人』朝日出版社、2009年。
L. G. Perdue, Families in Ancient Israel (Kentucky: Westminster John Knox Press, 1997)
R. H. Drummond, A History of Christianity in Japan (Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 1971)
O. Cary, A History of Christianity in Japan (Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1976)
H. Küng, Tracing the Way (London: Continuum, 2002)
L. J. Topel, The Way to Peace (New York: Orbis Books, 1979)